3．嘉納治五郎師範による柔道技名一覧

講道館／講道館柔道資料館　学芸員　本橋端奈子

キーワード：嘉納治五郎、嘉納治五郎自筆資料、翻刻

3．List of names of judo techniques by Jigoro KANO Shihan

Hanako MOTOHASHI　(Kodokan Judo Institute/Kodokan Judo Museum)

Key words : Jigoro KANO, Jigoro KANO's own handwriting, transcription

Abstract

This document is a list of judo techniques by Jigoro KANO Shihan, the founder of the Kodokan judo.

It describes the varirties of nagewaza and kaeshi-waza etc. It is presumed to date from the Kodokan's early days, from around 1886 to 1887.

This newly discovered material is being reprinted in its entirety and will be made available here.

Ⅰ．摘要

本資料は講道館柔道の創始者 嘉納治五郎師範（以下、嘉納師範と略す）による、柔道技名の一覧である。講道館の所蔵で、投技の種類や返し技、変化の仕方などが１枚にまとまっている。講道館草創期の明治19年-20年頃の資料であると推定される。柔道最初期の嘉納師範による技の分類、研究資料として貴重なものであるので、ここに新規発見資料として全文を翻刻･公開する。

Ⅱ．資料について

本資料は、先に発表した「柔道雑記」[注1)]（嘉納師範筆、明治21年）や柔道講義覚書[注2)]（嘉納師範筆、明治21年）等の資料と同じ保存箱に入り、講道館収蔵庫にて保管されていた。体裁は、猪紙全紙を横紙方向に使用しており、法量は縦41.0cm、横28.5cmである。

毛筆書きで投技の技名一覧、返技と誘技一覧、連絡変化の種類一覧などが記されており、

「柔道雑記」の文字形と照合して嘉納師範筆であると比定した。資料に年代は付されていないが、本資料と「柔道雑記」の投技名を比較すると、「柔道雑記」の方が技の数が整理され減少しているように見受けられる。嘉納師範は、明治20年前後に本当に講道館柔道が完成した、その頃より技は大きく変わっていない[注3)]と述べている。明治19年、講道館が東京市麹町区富士見町[注4)]に移転したころから、技の理論研究や分類研究が特に盛んに行われていたようである。「今日講道館で行はれている諸技の名稱やその類別（略）が出來たのも、亦この時代であつた。これを要するに、富士見町は講道館柔道の基礎を大體確立して、始めて日本の講道館、否少くとも帝都の講道館とした時代であつた[注5)]」といった述懐がよく見られるところでもある。「柔道雑記」で講道館柔道の大要が理論立てて解説できているのを見ても、嘉納師範が明治20-21年頃には講道館柔道が技術的な面で一応の完成をみたと考えていたと思われる。本資料は、その「柔道雑記」などに先立つ技術・理論研究の途中成果であり、明治19-20年頃の資料であると推測される。技を整理して名称を分かりやすくしていく過程が見られる貴重な資料であると言えよう。

資料として、技名一覧を、本資料・「柔道雑記」・五教の技とを比較した表を掲載する。また附資料として磯貝一著「柔道手引草[注6)]」（明治40年）の投技一覧も掲載する。「柔道雑記」や五教の技に見られる腰技の後腰・移腰・釣腰は、本資料には同名称の技が見られないが、本資料にある裏腰・前腰・釣上腰などに該当する可能性もある。本資料で全投技の詳細は不明であるので、表では名称が一致する技のみを並べて記載した。技の同定は向後の研究に期待したい。明治28年五教の技一覧では、あくまですべての技ではなく、柔道習得カリキュラムに沿った技に絞られている。頻出しない技は整理されていると考えられる。だが、明治40年の磯貝一著「柔道手引草」の技一覧には、巻腰・捨身腰・半腰など本資料にある技が多くみられる。これは、それらの技が消えたわけではなく、有効な技として認識されていたことが窺える。

柔道技名比較表

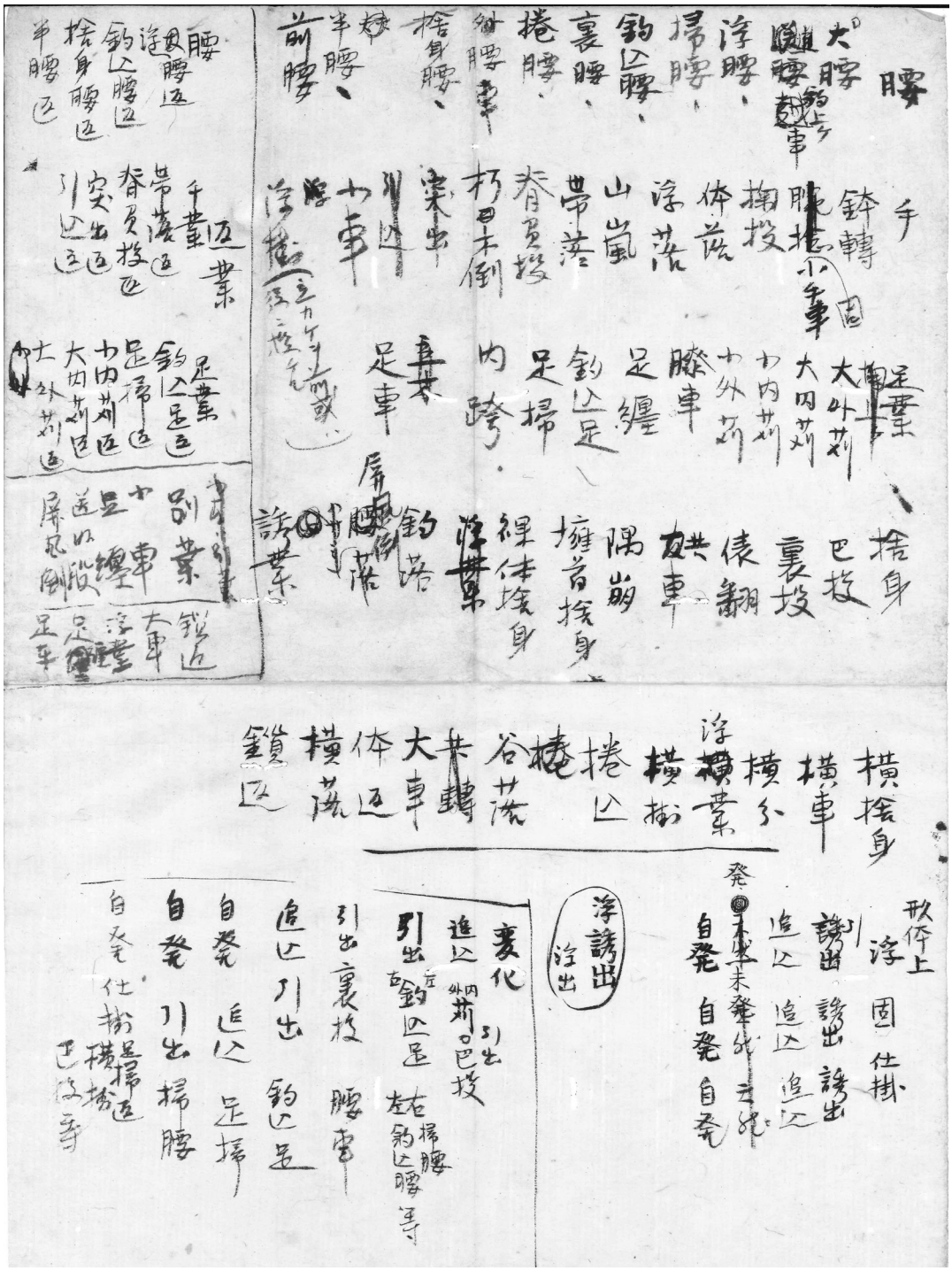
	明治19－20年 柔道技名一覧	明治21年 「柔道雑記」	明治28年 五教の技	（附）明治40年 磯貝一『柔道手引草』
腰業	大腰	大腰	大腰	大腰
	釣上腰			
	浮腰	浮腰	浮腰	浮腰
	掃腰	掃腰	払腰	掃腰
	釣込腰	釣込腰	釣込腰	釣込腰
	裏腰			
	捲腰			巻腰
	腰車		腰車	腰車
	捨身腰			捨身腰
	半腰	半腰		半腰
	前腰			
柔道技名一覧と名称が一致しない技名 腰業		後腰、移腰、大釣腰、小釣腰	後腰、移腰、跳腰、釣腰	後腰、移腰、跳腰、釣腰
手業	鉢轉			鉢轉
	固小手車			
	掬投	掬投		掬投
	体落	体落	体落	体落
	浮落	浮落	浮落	浮落
	山嵐		山嵐	山嵐※足業に分類

	明治19－20年 柔道技名一覧	明治21年 「柔道雑記」	明治28年 五教の技	（附）明治40年 磯貝一『柔道手引草』
手業	帯落	帯落	帯落	帯落
	背負投	背負投	背負投	背負投
	朽木倒	朽木倒		朽木倒
	小車			
	浮掛			
柔道技名一覧と名称が一致しない技名 手業			肩車、背負落	肩車、背負落、絹担
足業	大外苅	大外苅	大外刈	大外刈
	大内苅	大内苅		大内刈
	小内苅	小内苅	小内刈	小内刈
	小外苅	小外苅	小外刈	小外刈
	膝車	膝車	膝車	膝車
	足纏			
	釣込足	掃釣込足、支釣込足	払釣込足、支釣込足	払釣込足、支釣込足
	足掃	送足掃、出足掃	送足払、出足払	送足掃、出足掃
	内跨	大内股、小内股、高内股	内股	内股
	足車		足車	足車
柔道技名一覧と名称が一致しない技名 足業		大外落	大外車、大外落	大外車、膝折 大外落※手業に分類
捨身技	巴投	巴投	巴投	巴投
	裏投	裏投	裏投	裏投
	俵翻		俵返	俵返
	共車			
	隅崩			
	擁首捨身			擁首捨身※横捨身業に分類
	裸体捨身			
	釣落	釣落		釣落
	屏風倒			
柔道技名一覧と名称が一致しない技名 捨身業		隅翻（二種）、分、真向翻	隅返 引込返※「返業」に記載有	隅返、分 引込返※「返業」に記載有
横捨身業	横車	横車	横車	横車
	横分	横分	横分	横分
	浮業	浮業	浮業	浮業
	横掛	横掛	横掛	横掛
	捲込	内捲込、外捲込	内巻込、外巻込	巻込
	谷落	谷落	谷落	谷落※足業に分類
	大車			
	体返			
	横落		横落	横落
	鎖返			
柔道技名一覧と名称が一致しない技名 横捨身業			抱分	抱分

本資料が講道館柔道技の成立過程を明らかにする一端を担えれば幸甚である。

Ⅲ．凡例

1．末梢箇所は　で表した。そのあとに訂正がある場合は［　］で示した。抹消の判読不能箇所
2．見せ消ち（1度書いた文字を線などで消して、訂正前の内容が分かるようになっている箇所）は
3．割書（1行の半分の大きさの文字で、2行に割って書くこと）は〈　〉で示した。またその中で
4．傍書、追筆などは〔傍書〕などとして、そのあとに内容を［　］で囲って示した。



は□とした。
〻で示し、そのあとに訂正箇所を［　］で示した。
2行に亘る場合は、／で改行を表した。

腰
大腰
送送腰越［釣上ケ］車
浮腰
掃腰
釣込腰
裏腰
捲腰
外腰〔追筆〕［車］
捨身腰
替
半腰
前腰

手
鉢轉
腕捻〔傍書〕［固］小手車
掬投
体落
浮落
山嵐
帯落
背負投
朽木倒
突出
引込
小車
浮
浮掛〈立カケヲ前或ハ／後ニ投ケル〉

足業
掬上ケ
大外苅
大内苅
小内苅
小外苅
膝車
足纏
釣込足
足掃
内跨
立木
足車

捨身
巴投
裏投
俵翻
友〔傍書〕［共］車
隅崩
擁首捨身
裸体捨身
浮業
釣落
腰〔傍書〕［ハサミ］落
〔追筆〕［屏風倒］

横捨身
横車
横分
横［浮］業
横掛
捲込
谷落
共轉
大車
体返
横落
鎖返

形体上
浮
誘〔傍書〕［引］出
追込
未〔傍書〕［発］然
自発

浮誘出
浮出

固
誘出
追込
発〔傍書〕［未］然
自発

仕掛
誘出
追込
无然
自発

返業

腰
大〔傍書〕［浮］腰返
釣込腰返
捨身腰返
半腰返

手業
帯落返
脊負投返
突出返
引込返

足業
釣込足返
足掃返
小内苅返
大内苅返
大外苅返
小外

誘業
〔傍書〕［小□ハ別業］
別業
小車
足纏
送内股
屏風倒

鎖返
大車
浮業
足□纏
足車

変化

追込	内外苅〔傍書。〕［引出］巴投		
引出	左釣込足	右掃腰 左釣込腰等	
引出	裏投	腰車	
追込	引出	釣込足	
自発	追込	足掃	
自発	引出	掃腰	
自発	仕掛	足掃返 横掛 巴投等	

本文注

注１）講道館蔵、『講道館柔道科学研究会紀要』第十七輯（令和元年）掲載

注２）講道館蔵、『講道館柔道科学研究会紀要』第二十輯（令和７年）掲載

注３）「柔道家としての嘉納治五郎」『作興』第６巻第６号（昭和２年）

注４）現・東京都千代田区九段南

注５）「柔道発達の側面観−講道館の基礎漸く固まれる富士見町時代」富田常次郎著『作興』第３巻第１号（大正13年）

注６）「柔道手引草」第３回、磯貝一著『武徳誌』第２篇第５号。文中で「足掃」の項にある技は「足業」に分類した。比較表作成にあたり、講道館 津村弘三技術専門官に貴重な資料を頂いた